

見本市Interalpinを訪れて

オーストリア大使館商務部 上席商務官

高城 奈豆美



見本市Interalpin

今年、4年ぶりにインスブルックで開催された見本市Interalpinを訪れました。日本からの来場者も予想を遥かに上回る人数で、Interalpinの主催者も日本からの多数の来場を喜んでいました。オーストリアと日本は長年に渡り信頼と友好関係を築いているので、さぞ嬉しかったことと思われます。Interalpinの開催初日、4年ぶりの開催を楽しみに、スキー場の現場の方達やビジネスマンが朝から多く訪れていました。皆さん待ちわびていたのでしょう、今まで以上に活気に溢れていました。展示されている製品も、過去4年間でいかに研究開発が進み、テクノロジーが発展したかを感じるものが多く、中でも環境への配慮や労働者不足対策を踏まえた技術が目立っていました。深刻な雪不足とエネルギー対策、労働者不足問題はこれから更に大きな課題として各メーカーとスキー場で取り組まれていくのでしょうか。

今回の見本市視察に伴いシュトゥーバイとイシュグルを訪問しました。まず、4月19日はシュトゥーバイへ。そこそこ吹雪いていて、時折ホワイトアウトするほどだったのですが、幼児さん達がスキースクールで頑張っていたのが微笑ましかったです。この日は平日のど真ん中でしたが、イースター休暇の直後という要因もあってか、親子連れのスキーヤーが目立ち、カフェテリアは満席で座る場所を探すのにも一苦労なほどに賑わっていました。座る場所がなくて階段に座りこんで休憩を取る人たちもいました。

翌日4月20日はイシュグルを訪問。着いた途端から圧倒されました。すっかり元通りの賑わいを取り戻していました。私が泊まったホテルはほとんどの宿泊客がドイツ人でした。おそらく、一定の年齢・収入以上のドイツ人をターゲットに絞ったホテルなのでしょう。ホテルに併設されたレストランのメニューもドイツ人向けで、これぞオーストリアというデザートがなかったのが少し寂しかったです。ここは好みの問題ですが、せっかくオーストリアにいるのだからオーストリアの名物を食べたいと少し思いました。また、イシュグルではジルヴレッタバーンのマネージャーから話を伺う機会がありました。その中で、イシュグルはステイクホルダーが全員イシュグルで完結しているため、利益をすべて設備投資に回せるという利点は大きいと仰っていたのが納得できました。

シーズンを振り返って

では、ここから客観的にシーズン全体を振り返ります。

2020/21年の冬季シーズンはほぼ完全に閉鎖され、2021/22年のシーズンもパンデミックの影響を受けましたが、2022/23年のウィンターシーズンは、ほぼコロナ以前の水準に戻ることができ、ほとんどのスキー場が「パンデミックを克服」したと言われています。このシーズンは、シーズン終盤にパンデミックが発生した2019/20年と同程度だったそうです。また、スキー場の来場客全体としては日帰り旅行が多い傾向にあったとのこと

です。オーストリア統計局のトビアス・トーマス局長は「オーストリアの宿泊施設は、観光業にとって厳しい冬を2度も乗り越え、今冬も順調に予約が入っている。2023年2月の宿泊者数は1,744万人で、コロナ以前の2020年2月の宿泊者数を11.6%下回った。2月は冬の観光シーズンにおいて最も重要な月であり、冬の宿泊全体の4分の1以上を占めるため、この結果は今シーズンの成功に決定的な影響を与えるだろう」と述べています。

この宿泊数の減少はインフレと考えられます。
一般家庭であれば休暇中の出費、特に食事や買い物だけでなく、
宿泊費も節約したいと考えているので、高所得者層に特化した
観光地は、この状況をうまく乗り切ることができるでしょう。
こういった動きは、おそらく、入国者数や宿泊者数よりも、
現在のウィンターシーズンの売上高や価値創造に影響を与え
ると考えられます。

最後に

ここで今回の視察における私観に戻りますが見本市でもスキー場でもここ数年鬱積されて
いたフラストレーションやレジャー欲が一気に噴出している気がしました。これからも
様々な要因による難局があるとは思いますが、その中においてもオーストリアと日本の
スキー・山岳業界が次世代に繋がる変化と発展を遂げることを願っています。

高城 奈豆美 / Nazumi Takagi

オーストリア大使館商務部勤務。上席商務官。
2005年よりウィンタースポーツ担当。